

境は冬のからっ風をまともに受けることを除けば、研究や教育の場として申し分のないように思われたが、移転を契機として紛争が起これ、そして長期にわたるストライキや封鎖の末、やっと移転は、実施にまでこぎつけたのである。

紛争の最中、地理の一学生から、「学部の移転を本質的に考えてみたい、それには地域社会における大学の役割を把握し、それに基づいて移転の意義や可否を結論づけたい」というような相談があり、よい機会だから一緒に考えてみようということになった。学生の期待は「師範学校以来、数十年の伝統をもつ教育学部だから、日吉地区との結合が強く、その結合を断ち切って移転するのは、影響が大きく、移転反対の根拠が得られるかも知れない」ということになったように推測された。しかしそのようなデータを科学的に得ようとするのは意外に困難で、手のほどこしようがなかったらしい。そこで相談の結果、地域というものを日本全体、東日本、関東、東京との関係圏、群馬県、前橋市、日吉町というように階層的に考え、それぞれに対して教育学部がどのような関連があるかを考えることになった。

広い地域との関連については、卒業生の就職先、入学者の出身地・入学金や授業料の先行・諸経費の出所とその経路その他の調査から知ることができ、さらにその特色を明瞭にするために前橋市内にある医学部や、桐生市にある工学部と比較してみようということになった。前橋市との関連については大学に出入する商人や建設業者の居住地、および職員や学生の居住地の分布のうち前橋市内の占める比率を調べ、日吉町地区については戸別の聞き取り調査により、各戸と大学との直接的つながりを調べてみようということになった。私としては、このような調査により大学と地域社会との関係が具体的に明らかになり、大きな成果が期待されたので、大学の会計、庶務や学生課に照会したり、聞き取りの項目やアンケートの内容について検討をしたりして一人で張り切っていた。

しかしその後、何の音沙汰もないので、しびれを切らして聞いてみると、「あれはやめました。だって大学とその周囲とは何の関係もないですよ」ということだった。がっかりして前に相談した調査項目をながめていると、大学と地域社会との関係は、すべて大学がそこにできたために生じた関係であって、大学がそこに存在しなければならぬというような結合関係は何もないような気がするようになった。果たしてそれでよいのだろうか。このことは大学のあり方の根本問題にもつながるものではなからうか。

## 都 市 の 膨 張 と 気 候

荒 川 秀 俊

私は、ここ2年ほど、お茶の水女子大学の地学の講師（非常勤）をしている。渡辺光さんから「教養の先生は大学者がしなければいけないんだ。メートルを挙げて、放談の限りをつくすところに値打ちが

ある＃といわれたのをいいことにして、地学の講義に名を借りて、楽しくお話を、思いつくままに1時間半しゃべり続けることにしている。天下の才媛には、少し歯ごたえがないと思うが、感ずるところあって、その主義を押し通している。

私は去年、お茶の水女子大学に顔を出してから、貝山久子さんや吉見則子さんと一緒に、日本の大都市における気温・湿度の極めて特徴ある変化について調査し学会でも発表し、今年中には学会誌に掲載されることになっている。

元来、近代都市は、拡張されるに伴って、その気温は年々高くなり、湿度は年々低減する傾向のあることが、かなり以前（19世紀末頃）から指摘され続けられている。日本でも、東京とか大阪のような大都市では、年と共に気温が暖かくなり、また湿度が乾いてきていることは、市民にも実感として受けとめられている。冬になっても、スモッグがたちこめるために、身をきるような寒さになることは少なくなってきた。また化繊の着類をぬぐ時などは、パチパチと放電するほど、空気が乾くこともまれではなくなっている。このように、都市に気候異変がおこるのには、(1) 都市の膨脹によって大気汚染が増大することと、(2) 道路や建築物のコンクリート化、池や川にふたがされたり、追放されたりすることが、原因になっていると考えられている。

私たちは、東京や大阪のような日本の大都市の気温と湿度を、実測資料にもとずいて調べてみた。そうすると、戦前と戦後については、都市の気温は年々上昇しつづけ、湿度は年々下降しつづけていることが、明瞭に指摘できた。ところが、戦時中（昭和16年～昭和20年）だけは、判然と気温は逆に下降し、湿度は逆に増加していることが認められたのである。

過ぐる大東亜戦争中は、日本では産業活動が低下し、都市の疎開がおこなわれた。このため日本の空はキレイになり、隅田川のような都市河川もかなり澄んできた。このために大都市の気温は逆に下降したのであろう。また都市は荒廃したままに放置されていたので、湿度も逆に増大して行ったのである。

大東亜戦争は、まったく日本にとって悪夢であった。その戦争の爪跡が、こんな自然現象の上に乗って、藤をおとしていたのである。こんなことを、お茶の水女子大学地理学教室の皆さんと協力して実証したことを、せめてもの慰めとしている。  
(東海大学理学部教授)

## 渡 辺 先 生 と 私

土 井 喜 久 一

渡辺先生には学問的にも個人的にも、非常に恩をうけたものでありながら、御退官記念の論文集には、原稿も間に合わず、大変申し訳なく思っておりましたが、「お茶の水地理」から機会を与えられ、その恩